

“Vril”を読む

『来るべき種族』の翻訳を通して

英米学科
小澤正人

1. “Vril”を読む

“Vril”とはイギリスの政治家・小説家エドワード・ブルワー＝リットンのエートピア小説『来るべき種族』*The Coming Race*(1871)に登場する超自然的エネルギーの名前である。

語り手が迷い込んだ地下の大空洞には科学の進んだエートピア社会が存在し、その住人はこの「すべてに充満する流体に蓄えられた潜在的な力」(邦訳 51 頁、以下の引用も同訳書による)を駆使している。この力は、「稲妻のような破壊力を持つこともできたが、別の力で応用すると、生命を補充したり、活性化させたり、治療したり、保存したりすることもできた。」(51-52) また、とてつもない破壊力を持ち、簡単に軍隊や都市を滅ぼすこともできるほどで、これを個人が自在に使えるようになった結果、戦争もなくなり、豊かなエネルギーを利用した平等なエートピアが成立している。

しかしながら、本論が取り上げるのは、このエートピアや超自然的エネルギーの内容ではない。筆者がこの本を翻訳しながら悩んだ問題点、つまり、①“Vril”という言葉はどのように発音されたか、どんな音を表しているのかと、②それをどのように日本語で表記するかという点である。

もう少し広く言えば、ファンタジーや SF に出てくる異世界の言語の発音をどう表記するかを、特に固有名詞について検討し、日本語表記にすることで異世界の音声が発音可能な表現にいわば「馴化」されるのではないかと考察することである。

結論を先に述べておけば、英語のアルファベットはそれぞれが子音や母音を示すため、その組み合わせは英語としては不自然な連鎖や、発音できない連鎖を作ることが可能で、結果として発音困難な、あるいは発音不可能な単語を作ることができる。

一義的で、対象を明確に示すはずの名前が、発音の困難な、あるいは不可能な単語である時、それは読み手を驚かせたり躊躇させたりする。一種の「異化効果」をもたらすともいえる。その語が指示している対象が、日常的なストレートに受け入れられるものではないことを暗示する。

それに対して、日本語の仮名は各文字がすべて発音可能であり、仮名を続けても発音不可能な単語を作ることができない。結果として、単一の発音可能な読み方を強制されると言ってもいい。上で述べた「馴化」とはこれを指す。(これは、ここでは論じないが、さまざまなファンタジーにおける名前の重要性(真の名、名付けの力など)とも関係していると思われる。)

次節で挙げる「フーインツンム」はかなり発音が難しいがそれでも不可能ではないような気

がする。漫画などにある「ア」「イ」などに濁点を付けた表記についてはここでは取り扱わない。

また、架空言語の文法論、意味論のような問題は置いておく。英語の発音をどのように日本語であらわすかという一般的な問題もとりあえず棚上げしておく。

以下では、まず幾つかのファンタジーや SF における表記を概観し、ついで、特にしばしば発音や表記が話題となる“Cthulhu”について論じた後で“Vril”について考えてみたい。

2. 『ガリヴァ旅行記』、『ペガーナの神々』、『火星のプリンセス』

(1) 『ガリヴァ旅行記』

ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァ旅行記』*Gulliver's Travels* (1726)で、ガリヴァは4つの航海について述べている。彼が訪れる国と日本語表記(中野好夫訳)をまとめると表 1 のようになる。

表 1

	英語	日本語表記
第一の航海 小人国	Lilliput	リリパット
二の航海 大人国	Brobdingnag	ブロブディンナグ
第3の航海 ラピュタ他	Laputa Balnibarbi Luggnagg Glubbubdrib	ラピュタ バルニバービ ラグナグ グラブダブドリッブ
第4の航海 フウイヌム国(馬の国)	Houyhnhnms (国名ではなく住民を指す言葉)	フウイヌム

『ガリヴァ旅行記』のように有名な作品の場合、辞書に発音表記がある。例えば、Lilliput については研究社新英和大辞典には / lɪlɪpət, lɪləpət, -pət, -pət/ が示されている。(3番目と4番目の ə と ɪ には第2アクセントがつく。一部表記を変更した。)

数種類の発音を示されているが、これらの発音は、この単語を見た英語話者があまり悩むことなく想像する発音であろう。日本語表記した場合「リリパット、リラパット、リリプット」などが考えられるが、それらは英語発音を日本語表記する際の一般的変異の幅に入ると思われる。例えば “climate” を「クライメット」とするか、あるいは「クライミット」や「クライマット」とするかのように。以下ではこうした点についてはあまり立ち入らない。

“Huntington” を「ハンティントン」、「ハンティングトン」共に表記しうるように、“Brobdingnag” を「ブロブディンナグ」とすることも可能である。「ブロブヂンナグ」も可能かもしれないが、現代では古風すぎて、かなり意識的に行うのであれば避けられるであろう。

音と語感については、“Lilliput” に対して little や petit, petty など を挙げて小さな感じが

するとしたり、“Brobdingnag”に対して **big** や **broad**、**ding dong**などを挙げて大きな感じや重い感じがすると言う考えもあるだろうが、母音や子音に特定の感覚を与えるのは恣意的になりかねない。また、特定の音に一定の文化的連想が働くことがあるとしても、それは文化によって異なることが多く、「リリパット」という音が日本語でも小さな感じを与えるとは限らないだろう。

小人国、大人国について、体の大きさが精神の大きさを比喩的に示すと考えることもできる。大人国の巨人に対しては、イギリス(やそれ以外の現実の人間社会)の欠点を「拡大している」面もあるが、ガリヴァがイギリスについて自慢した時の大人国国王の反応、特に火薬と銃を自慢することへの国王の嫌悪の表明は、精神の大きさの差を示している。また、第3の航海で訪れる「ラグナグ」の不死人“**the struldbrugs**”「ストラルドブラグ」は、外見はガリヴァと同様の人間であるが、不死という点では全く異なるものだということができる。更に、第4の航海で出会う「フウイヌム」“**Houyhnhnms**”は馬そっくりの生き物で人間とは別種の存在である。

ガリヴァが訪れる国々の名前と住人や社会を比較してみると、ガリヴァに代表される「普通の人間」から離れるにつれて名前から英語らしさがなくなるようにも見えるが、それでも第3の旅までは外国の地名を英語で表記しているように見てもよさそうに思われる。つまり、アルファベットで表記されているが、その綴りとそこから想定される発音は英語としてありうるものに思われる。(非英語的に感じられる音の連鎖がないと言ってもよい。)

これは人名についても同様である。例えば、小人国国王は次のようになる。

**“GOLBASTO MOMAREN EVLAME GURDILO SHEFIN MULLY ULLY GUE,
most Mighty Emperor of Lilliput”**

至高にましますリリパット国王ゴルバスター・モマレン・エヴレイム・ガーディロウ・シェフィン・ムリ・ウリ・ギュー皇帝 (中野訳)

大人国でガリヴァの世話をする娘の名前は“**Glumdalclitch**”(中野訳 グラムダルクリッチ)で、これも外国風ではあるが、英語話者は困難なく発音できであろうし、中野訳も一般的な英語発音の日本語表記として認められる。

だが、第4の旅でガリヴァが出会う馬そっくりの生物“**Houyhnhnms**”の場合は少し違う。

この生物は、ただ鳴いているのではなく、未知の言語を使っているらしい。「聞いたところでは、彼らの言葉はちゃんとそれぞれの感情を表しているらしく、その単語も中華語などよりは遙かに容易にアルファベットに分けられるような気がした。」(邦訳 217 頁、以下の引用も同訳書)ガリヴァは彼らの発音をまねてみる。

すると今度はまた、栗毛の方が別の単語をやってみてくれた。これはだいぶ発音が難しかったが、強いて英語の綴りに直してみると、まず、だいたい **Houyhnhnms** といったところだろうか。(277)

中野はこの語を、本文中初出のこの個所では英語のまま記し、その後は「フウイヌム」とカタカナにしている。ただし、第4篇の題名“**A VOYAGE TO THE COUNTRY OF THE HOUYHNHNMS**”は既に「フウイヌム国渡航記」としてカタカナ表記されているから、ここでは読者に英語表記を示すために英語にしているのであろう。ガリヴァはこの語の語源は「自然の

完成物 the *perfection of nature*」であると述べている。

中野はこの英語の部分に注を付けて「発音については諸説あり、しばらくジョーンズ発音辞典に従った」としている。Daniel Jones の発音辞典ではこの語の発音は[*huː.i.n̩.əm*, US *ˈhwin.əm*]である。『研究社新英和大辞典』ではイギリス発音は/*húːɪnəm*, *huːɪn-*/(2番目は *i* にアクセント)で、語源欄に「《1727》馬の鳴声を示す *whinny* からの *Swift* の造語」とある。

この発音表記をカタカナにすると確かに「フーイナム」「フーイヌム」といったところであり、中野が「フウイヌム」としたのも可能な範囲に入ると思われる。

しかし、“*Houyhnhnm*”の綴りから Jones や『研究社新英和大辞典』の発音表記が出てくるかという疑問がある。前半“*houy-*”を/*húːi*/と読むのは可能としても、語の後半“-*hnhnm*”については、*h* は呼気を表しているのかもしれないが、子音のみが続いている。つまり、馬そっくりの生き物の鳴き声をガリヴァが「強いて英語の綴りに直し」たこの語の後半は英語の音のつながりとしてはかなり発音困難である。Jones が[*huː.i.n̩.əm*]としたのは、英語として発音しやすくしていると考えられる。

ガリヴァは馬そっくりの生き物の発声器官から出た声を自分でもまねながらなんとか英語表記に移そうとした。ただ、その表記を見た人間がその綴りから元の発音を発することができると考えていたのかは分からない。作者 *Swift* の意図を推測するならば、この発音の困難さが“*Houyhnhnms*”と人間の隔たりを示しているということである。

では、日本語表記するとしたらどうだろうか。*h* を「フ」とすると「フーイフンフム」となり、英語での発音の困難さ(異質性)がほとんどなくなってしまう。*h* が発音されないとすれば「フーインム」となる。*h* を呼気として無理に促音にすると「フーイッンツム」となり、かなり発音しづらくなるが、それでも無理やりに発音できるかもしれない。

繰り返しになるが、最初の日本語表記の場合、元の英語綴りにあった発音困難性がなくなり、日本語として「普通に」発音できてしまう。その語の持つ不自然さ、非人間的要素が消えてしまう。第1節で「馴化」と述べたのはこのことを指す。2番目はやや発音しにくいそれでも読めそうな気がする。最後の「フーイッンツム」のような例は日本語としては数少ない発音困難な連鎖ではないかと思われる。この日本語の音が“*Houyhnhnm*”の「元の音」をどの程度「再生」しているのかは何とも言えないが、人間には発音できない異質な生物の言語という側面を示すことは可能であるかもしれない。

(2)『ペガーナの神々』

『ペガーナの神々』*The Gods of Pegāna* (1905)はロード・ダンセイニが創造した神話であり、*Pegāna* に住む神々のことが描かれている。

“*Pegāna*”と“*MĀNA-YOOD-SUSHĀĪ*”には長音符号 (macron) が付いているが、インターネットで諸版を見ると長音符号のないものも散見される。ここでは長音符号付きの版を使用し、またそれは長母音を示すとし、二重母音を示すとは考えない。神々は小文字で“*gods*”と書かれているが、次の引用のように文頭でない箇所でも *Their* で受けている。“*Then said the gods, making the signs of the gods and speaking with Their hands lest the silence of Pegāna shoud blush; . . .*”(12)“*MĀNA-YOOD-SUSHĀĪ*”のみすべて大文字で書かれているのは、世界と神々を生み出した特別な存在だからであろう。

Before there stood gods upon Olympus, or ever Allah was Allah, had wrought and rested MĀNA-YOOD-SUSHĀĪ.

There are in Pegāna Mung and Sish and Kib, and the maker of all small gods, who is MĀNA-YOOD-SUSHĀĪ. Moreover, we have a faith in Roon and Slid. (8)

作品内では、この神々の名前はだれがつけたのかは分からない。
 翻訳にはいくつかの版があるが、ここでは荒俣宏訳(1975)と安野玲訳(2005)を表2で比較する。

表2

英語表記	日本語表記 上段は荒俣訳、下段は安野訳
MĀNA-YOOD-SUSHĀĪ	マアナ=ユウド=スウシャイ マーナ=ユード=スーシャーイ
Skarl	スカアル スカール
Kib	キブ キブ
Wornath-Mavai (楽園の名前)	ウォルナト=マヴァイ ウォルナス=マヴァーイ
Limpang-Tung	リンパン=タン リンパン=トウング
Yoharneth-Lahai	ヨハルネット=ラハイ ヨハルネス=ラハーイ

これらの名前は、英語から見ると異国風であり、独特な雰囲気を持っている。何通りかの読み方ができそうなものもあるが、英語話者が発音に苦労しそうなものはない。試みに MĀNA-YOOD-SUSHĀĪ について綴りから発音を考える。MĀNA は長音符号があるので「マーナ」であろう。YOOD は(英単語の連想からは)「ユド」か「ユッド」、「ユード」。SUSHĀĪ、は U に長音符号が無いので、「スーシャーイー」とせず、「スシャーイー」だろうか。

英語は同じ文字連鎖に対して複数の発音が存在することがある。“foot”と“food”では“oo”の部分の発音が異なる。“food”と“good”を比較すると“-ood”の場合でも発音が異なっている。英語の綴りと発音のこうした関係については、英語史や英語音声学の観点から説明できる部分も多いが、表面上はいかにも混乱しているように見える。

それに慣れていないからかどうかは分からないが、ファンタジーで英語でない言語の発音を英語表記する際に、ある音を示す表記が複数あるように見えることがある。例えば、SUSHĀĪ の U は長音符号がないから「スーシャーイー」でなく「スシャーイー」だとした場合に、YOOD を「ユド」と読むと同じ/u/の音に U と OO の2種類の表記があることになるし、「ユード」と読むなら

Ū を使えばいいのではないかということになる。「ローマ字式」表記と考え「ヨオド」「ヨード」のように読むのも一案だが、それならば Ō を使う方がはっきりする。これは、著者が作中の架空の言語を英語表記する時に表記法の規則をあまり厳密に決めていないとか、英語表記の見た目や雰囲気重視していると考えられることもできる。

長音符号の使用について考えると、Wornath-Mavai と Yoharneth-Lahai の後半をどう読むかが分かり難い。Ā があるのだから ā もあるとすると、長音符号のない a は「ア」となる。その場合、Mavai と Lahai は「マヴァイ」「ラハイ」ではないだろうか。安野訳で「マヴァーイ」「ラハーイ」として、後ろの a のみ伸ばしている理由は不明である。

この二つの固有名詞については th の読み方も訳者で違っている。荒俣訳では/t/と読み、安野訳では/θ/に読んで、「ス」を充てている。(th については、英語として読むと/θ/ではないかと思われるものがファンタジーでは/t/に読まれていることが多いような気がする。)

日本語でいかに表記するかという点では、表 2 で一番目立つ違いは荒俣訳が長音に「棒引き(一)」を使わず、「マアナ＝ユウド＝スウシャイ」のように表記していることであろう。「マーナ」と「マアナ」の発音は意識的に区別した発音をすれば多少異なるかもしれないが、実質的にはほぼ同じなのではないかと思われる。しかし、見た目の違いは多分それ以上に大きく、訳者が独特な神話的雰囲気を日本語表記に反映させようとした工夫と考えることができる。とは言え“Skarl”のように一見普通の英単語のような名前を「スカアル」とするのは原文に何かを付け加えすぎているかもしれない。「スカアル」だけ「スカル」にするのも統一性がなくなるが。

始めに述べたように“MĀNA-YOOD-SUSHĀĪ”だけはすべて大文字で書かれており、他の神々とは異なる大いなる存在であることが示されている。表記上の工夫としては、傍点を打つ方法(旧来の翻訳では英語でイタリック体であった部分を示す方法)や、〈 〉や《 》に入れる方法、字体をイタリック体やゴシック体に変える方法などが考えられるが、この語の雰囲気を伝えるのは難しいと思われる。

(3)『火星のプリンセス』

『火星のプリンセス』*A Princess of Mars* (1917)は、アメリカの南軍騎兵隊大尉ジョン・カーターが突然に火星に飛んでいってしまい、火星のヘリウム王国王女デジャー・ソリスを助けて大活躍をする物語である。著者は E. R. バローズで、1912 年に雑誌に発表され大人気となり、1917 年に単行本で出版された。

火星人には赤色人と緑色人がいる。(後に白色人、黒色人、黄色人もいることが判明する。)赤色人は外見は地球人とそっくりである。ただし火星人はみな卵で生まれる。緑色人は 4 本の腕を持つ巨人で、口には大きな牙が生えている。

表 3 に主要登場人物と日本語表記を挙げる。

表 3

	英語表記	日本語表記
緑色人	Tars Tarkas	タルス・タルカス
	Sola	ソラ
	Sarkoja	サルコジャ

	Lorquas Ptomel	ロルクワス・トメル (注)
	Tal Hajus	タル・ハジュス
赤色人	Dejah Thoris	デジャー・ソリス
	Tardos Mors	タルドス・モルス
	Mors Kajak	モルス・カジャック
	Kantos Kan	カントス・カン
注 小西宏訳ではプトメル		

英語の名前は多少異国風ではあるが、発音困難なものはない。“Ptomel”も“Ptolemy”や“pteranodon”などから「トメル」と読める。“Tars”は Mars と韻を踏むとすると/taəz/かもしれない。r を「ル」とするのは一般的に行われていると言えよう。

緑色人と赤色人の名前にははっきりした違いがない。文化的・種族的差異をあまり考慮していないのだろう。言語が共通という前提も分かりやすさのためと言える。緑色人は人間と同じようには発声できないだろうが、それは気にしていないように見える。バローズはエキゾチックでありながら、むしろ読みやすともいえる名前を用いて、名前の読み方に悩むことなく入り込める冒険物語を描いた。神話的世界を描いた『ペガーナの神々』との違いはそこにある。

3. “The Call of Cthulhu”

“The Call of Cthulhu”(1928)は H. P. Lovecraft による短編で、1928 年に雑誌 *Weird Tales* に掲載された。Cthulhu とは、太古に宇宙のかなたから地球にやってきた Great Old Ones と呼ばれる神にも近い存在の一つで、この作品では、R'lyeh と呼ばれる土地の地下深くに封印された Cthulhu が復活しようとしている恐怖が描かれる。彼が書いた、共通の背景を持つ作品群は“Cthulhu”神話とも呼ばれる。後に Lovecraft 以外の作家もその設定を借りて作品を発表し、そこには多くの異界の存在が描かれている。Great Old Ones やその他の存在の英語名と日本語表記を幾つか表 4 にあげる。日本語表記が複数あるものも多いが、『クトゥルー神話事典』にある表記を挙げる。

表 4

英語表記	日本語表記
Cthulhu	クトゥルー、クルウルウ、クトゥルフ、ク・リトル・リトル、チュールー、九頭竜 (注)、
Nyarlatotep	ナイアルラトホテップ、ナイアーラトテップ、ニャルラトホテブ
Yog-sothorh	ヨグ＝ソトース、ヨグ＝ソトホース、ヨグ＝ソト
Tsathoggua	ツアトウグア
Dagon	ダゴン

Ghatanothoa	ガタトオーア
注 「九頭竜」についてはここでは論じない	

Cthulhu の日本語表記にはいかにも綴りとかけ離れているものがある。これについては後述する。それ以外の名前については、ここまでで論じてきたような点を除くと、発音と表記に関する問題はあまりない。この表にあげた英語名は異国風ではあるが、英語としてあまりに不自然な文字連鎖はない。Nyarlathtep についてみると、yを「イ」とするか「アイ」とするか、rを「ル」とするかどうか、thの部分をどう読むかといった点で表記の違いが出ている。これは(表にあげなかったものも含めて)他の存在の名前の読み方についても当てはまる。

地名ではあるが、R'lyeh は発音が難しい。『クトゥルー神話事典』は「ルルイエ」、「ラ・イラー」、「ル・リエー」を挙げている。アポストロフィは音の区切りであろうと思われる。R の発音は「ル」「ラ」ではなく、むしろ「ア・リエー」のように聞こえるのではないかと思うが、綴りを意識するとラ行の音を入れたくなる。カタカナにするとrとlの区別がつかなくなるのはやむを得ないところであろう。

ただし、この表記は/r/と/l/の区別があることを前提としている。この区別や、th、f の存在、あるいは子音の連続や音節が子音で終わる点などは、英語話者にとっては当然に思えるのだろうが、日本語表記に変えるという作業をしてみると、自文化中心主義的なのが分かる。異世界文化や人間以外の生物の思考様式をテーマにしたファンタジーやSFでも言語学(特に意味論や統語論、ここで見るような音声学)に踏み込んだ作品は少ない。言語と文化に注目している作品でも「サピア=ウォーフ仮説」までで、物足りない思いをすることがある。

ファンタジーや SF で、異界の言語を英語表記したとされている語の読み方について、どのような点が発音の揺らぎを生むか、前節までに論じた部分も含めて、簡単にまとめておく。

- 母音 例えば“a”は、「ア」「アー」「エイ」などに読むことが可能。(日本人の名前でも、“Aoki”(青木)が「エイオウキィ」、「Ozawa”(小澤)が「オザウエイ」と読まれることがある。
- th /θ/か/ð/か決めかねることがある。また、翻訳では/t/に読むことがあるが、理由はよくわからないことが多い。
- gh, dh, vh など “Ghatanothoa”は h の入らない “Gatanothoa”と発音が違うのか。違うとすればどう変わるのか。
- h 英語の単語には見かけないような連鎖に入ることがあり、その際の発音が不明。英語以外の言語の英語表記において、hやアポストロフィ’を子音字の後において有気音を示すことがある。“Houyhnhnms”も参照。
- アポストロフィ’ 音の区切りとして使うことが多いようだがよく分からないことが多い。上の項参照。(IPA では放出音を示すが、それを意識しているものはほとんどないであろう。) “R'lyeh”参照。
- 英語の子音連鎖の規則に合わない連鎖 例えば語頭に子音が 3 つ続くときは最初は/s/、二番目は/p, t, k/のどれか、3番目は/l, r, j, w/のどれかとなる。語尾の場合、tempt や lent はあるが*teptm や*letn はない。(川越、89-91)こうした規則に反した連鎖のある語は、英語としては不自然で、異国的な雰囲気を生み出す。既に述べたように、“Cthulhu”や“Vril”の語頭は非英語的であるが、カタカナにするとそれがはっきりしなくなる。

Tsathoggua はクラーク・アシュトン・スミスが創作したもので、その親族には Cxaxukluth、Ghisguth、Hziulquoigmznzhah、Ycnagnnisssz、Zstylzhemgni などがいるとされる。これらは意図的に非英語的で、また特定の異国風ではない、つまり非人類言語的な文字の連鎖を試みていると思われる。

この非英語的な名前が人類からの距離を示唆する。読者はとりあえず何らかの自分の読みを決めて読むのであろうが、その時のためらいが「人ならざるもの」の不気味さを増強する。しかし、例えば、“Hziulquoigmznzhah”を「フジウルクォイグムズハー」と訳すと、翻訳者の苦労は当然あったにせよ、発音可能で単一の読みが成立してしまう。

また、驚きや躊躇は繰り返されるにつれて減少していく。その結果より新しい驚きを求めて異質なものがさらに要求されるというインフレーションの恐れは常に存在している。

表 3 に見られるように、“Cthulhu”神話の中で、Cthulhu は特に読み方が多い。これは、作者 Lovecraft による発音の説明が問題にされたり、綴り通りに読むと違うといった見方があるからである。

作品の本文中でも、この語は苦労して英語表記化したもの、かろうじて文字にしたものと繰り返される。例えば、ウィルコックスは夢で聞いた“a voice that was not a voice”からなんとか音にしてみる。

he attempted to render by the almost unpronounceable jumble of letters, ‘*Cthulhu fhtagn*’ (143)

The two sounds most frequently repeated are those rendered by the letters “*Cthulhu*” and “*R’lyeh*”. (144)

また、ウェブ教授がグリーンランドで遭遇したカルトの儀式。

and of this [rite] Professor Webb had taken a careful phonetic copy from an aged *angekok* or wizard-priest, expressing the sound in Roman letters as best he knew how. (149)

ここで聞いた呪文はルイジアナで発見された謎の呪文と同じものだった。それは、“*Ph’nglui mglw’nafh Cthulhu R’lyeh wgah’nagl fhtagn.*”というもので、意味はほぼ “*In his house at R’lyeh dead Cthulhu waits dreaming.*”である。(150)

荒俣は「Cthulhu—発音の謎」で諸説を紹介している。森瀬の「訳者解説」や Penguin Classics 版の Joshi の注を合わせて Cthulhu がどう発音されるかを見てみる。

Lovecraft の友人 Donald Wandrei は Lovecraft から聞いたとして “K-LÜTL- LÜTL” だと書いている。荒俣は「ラヴクラフトらしい術学者(ペダントリー)が気に入って」これを採用し、「ク・リトル・リトル」と日本語表記した。その後、1936年の Lovecraft の書簡から、この語は人間の発声器官では言えないとしつつ「不鮮明なかたちのシラブルを、呻くように、吼えるように、あ

るいは咳こむように、口蓋の上がわをしたにしっかりつけて Cluh-luh と発音した時の音だろう」と述べた説明が発見されたが、荒俣は“K-LÜTL- LÜTL”の TL は無声音だから、これと似た発音となると認めながらも「Cthulhu が決して綴り通りの発音ではない(ラヴクラフトがそれを意図しなかった)」とし、彼としては「ク・リトル・リトル」を選ぶと述べている。

ここでは、Cthulhu を何と読むかと、日本語でどう表記するかが混乱している。TL が無声音で云々というのは、この部分の音が「トル」という日本語の発音にはならないということであり、「ク・リトル・リトル」と音訳しては彼自身が想像している発音とはかなり違ってしまわないだろうか。

Joshi は 1934 年の Lovecraft の手紙を引く。(森瀬もこれを引用している。)それによると、この語は “*absolutely non-human word*” で、人間が完全に発音することはできないが、実際の発音は “*Khûl’-hloo, with the first syllable pronounced gutturally and very thickly. The u is about like that in full and the first syllable is not unlike klul in sound, hence the h represents the guttural thickness.*” (395) である。

なお、森瀬は、他の書簡にある “Cluh-huh” などを挙げながらも、「[ラヴクラフトが]書簡中で説明しているのはあくまで「本来の神名」であって、エンジェル教授が便宜上使用した「Cthulhu」という当て字の読みではないということは、どうも見落とされがちだ」(459)とも述べている。

大瀧は、『ネクロノミコン』はラテン語版しか残っていないとされており、ここに記せられた Cthulhu はラテン語系であり、th は Θ の音訳で「氣息をとまなう t 音」だとしている。(147)

人間でない存在の発する音声なのだから、英語であろうが何語であろうが、人間言語で完全に再生できるはずがないのは当然である。しかし、Lovecraft の説明に振り回されるようにしてさまざまな発音が生じてしまった。しかも、そこには、正しい発音はこの綴りを素直に読んだ形ではないという考え方が出ているように思われる。

“The Call of Cthulhu” だけを読む限りでは、“Cthulhu” の表記はウィルコックスが夢で聞いた声を写し取ったものと、エンジェル教授の聞き取ったものである。別々の人間が非人間的な声を文字にして同じ綴りになるのも変だし、それが『ネクロノミコン』などの古来の記録に載った表記と同じというのもさらに奇妙ではあるが、そこは置いておくしかないであろう。(ポーの「モルグ街の殺人」参照。)

できる限り正確に写したというのであれば、その綴りをそのままに読むほうがいいのではないかという考え方はある。また、この作品だけを読む読者にとっては上に挙げたような各種の発音に関する注はないのだから見たとおりに読むのが普通ではないだろうか。Wikipedia 英語版では “Cthulhu (/kəˈθuːluː/ kə-THOO-loo) is a fictional cosmic entity created by writer H. P. Lovecraft . . . ” と書かれている。このままならほぼ「クスールー」となる。(多分これでは「重み」がないのだろう。)

ここで重要なのは、Cth- が /kθ-/ でなく、/kəˈθuːluː/ となっていることで、Cth- がそのままでは英語的な発音ではないということである。これまでに見た解説などでもこの点はあまり論じられていない。(cth や kth で始まる単語は英語にはほとんどない。chthonian ((神や霊が) 地下にすむ 語源はギリシア語 *chthónios*) はあるが、発音は /θóunian/)。

Cthulhu についても、すでに述べてきたように、どのように日本語表記をしても原語の持つ

ていた異質性や不安感はだいぶ消えてしまうように思われる。

4. 『来るべき種族』と“Vril”

始めに述べたように、“vril”は作品中で重要な意味を持つ謎の力を指す。*Vril: The Power of the Coming Race*のように書名にしている版も存在する。

“Vril”を書名とした本でない場合で、裏カバーなどからの予備知識が無ければ、この語は第7章で最初に現れる。地下世界で不思議な種族と出会い、混乱して失神した語り手が、目を覚ましてその家の主人と娘と会話をする場面である。娘のズイーが「ヴリル」という言葉を使う。

〈ヴリル Vril〉を正しく使えば、その一振りで、異国の人から聞いたことの記憶さえも頭の中の書字盤から消し去ってしまうことができるでしょう？(43)

ここで筆者は「ヴリル Vril は慣例に従い〈ヴリル〉と表記した。発音については訳注 30 を参照されたい」と注を付けた。(訳注 11 240) 本文中に英語で“Vril”を付け加えたのは〈ヴリル〉という日本語の原語を示すためである。この単語はオカルト的な書物などによく出てくる単語であり、翻訳が出版される以前から、日本では「ヴリル」や「ブルル」という訳語が一般的に使われている。

単語だけを見れば、“vril”の英語発音は/vrɪl/であろうし、それをカタカナで「ヴリル」と表記することも自然に思われる。v を「ヴ」で置き換えることも、r と l を共にラ行であらわすことも一般的に行われている。ただし、日本語ではカタカナ 1 文字が 1 音であり、「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」と並べるとわかるように、「ヴ」だけの場合には 1 文字で/vu/と読まれる。また、「ヴ」とあっても「ブ」と発音されていることもある。それ故、「ヴリル」というカタカナは/vurɪru/あるいは/burɪru/と発音されているかもしれないし、アクセントが最初に置かれて/vúriru, búriru/となる可能性もあるが、それでも“vril”をカタカナで表記するとしたら「ヴリル」となるだろう。

英語では vr- で始まる単語はほとんどない。外国の人名、地名や、外国語がそのまま使われた語(例えば“vrou”:南アフリカで、オランダ人の妻を指す。オランダ語から入った語)などを除くと、飛行機のきりもみを指す“vrille”(フランス語から)やエンジン音を示す擬音語“vroom”くらいである。つまり、英語話者にとってはあまり見かけない、口になじまない、違和感を与える言葉であり、地底に住む人々や社会の異質性を示唆している。

日本語でヴで始まる語はほとんどが外来語であるので、「ヴリル」もその点では違和感を多少持つかもしれないが、「ヴ」で始まる語自体はよくある。また、「ヴリル」という表記もあまり困難なく発音できそうに思われる。

ただし、“vril”の問題点はむしろ別のところにある。先にあげた注 10 で注 30 を参照するように書いたのは、後者に地下世界の住人の言語についての説明があるからである。語り手は彼らの言語についてかなり詳しく説明しているのだが、よく読むと単語と発音の関係はどうもおかしい。

第 10 章では、Ana と An という語が説明されている。それぞれ英語の men と man に対応するが、発音は「アーナ」と「アーン」であると書かれている。つまり、「アーナ」という音を持つ単

語があり、それを英語のアルファベットで **Ana** と表記したが、それだけでは不十分かもしれないので「口を大きく開けてアーナと発音される」と補足しているということである。注 30 のある第 12 章でも音と意味について述べている。幾つかの語については、彼らの使う単語の音をアルファベットで表記しているようである。

ところが、“**Vril**”に関しては少し違っている。まず〈至高の存在〉はピラミッドを表す“**Λ**”で象徴されると述べ、「逆転したピラミッドを象徴する文字 **V** は、語頭に置かれた場合には、すでに何度も述べた **Vril** のように、ほとんど常に優越性とか力を示している」(74)と書かれている。だとすると、作品中で“**Vril**”と英語表記されている単語はいったい何なのだろうか。**Λ** も **V** もここではその形をした記号であり、その音は不明である。“**-ril**”の部分が/**-ril**/という音を表すアルファベット表記であるとする、“**Vril**”は記号と音を組み合わせたものになってしまう。本文を読む限りではこの語は音を表しているとは言えない、発音できない言葉なのである。

読者は後の部分で出てくる単語の説明なしにまず **vril** という言葉を本文中に読むわけで、見かけない単語だと思いつつも/**vril**/と思って読んでいくのではないだろうか。そして、多くの読者は、第 12 章での説明を読んでもあまり気に留めず、この語をそのまま/**vril**/と思っている。日本語表記にした人たちもそう思って「ヴリル」と書き、日本語ではこの時発音も決定している。

マックス・ミュラーに献辞を書き、本文中でも地下世界住人の言語についてかなり詳しく解説している作者が **Vril** については発音の説明がないことに気づいていなかったとは思われない。発音できないとは、真の名を明かされていないということでもある。

〈至高の存在〉は外部のものにその名を示すことが許されていない。それを表す“**Λ**”もピラミッドを象徴しているが、読み方は分からない。**V** も同じなのかもしれない。『来るべき種族』では「ヴリル」について大いに述べながら実はその本当の発音は示されていない。

読み方が分からないことについて、筆者は訳注で語り手の説明が混乱しているということかもしれないと書いたが、実は語り手の、あるいは著者の何らかの意図がそこにあったのかもしれない——と言うといかにもオカルト小説的ではある。

とはいえ、ブルワー＝リットン自身も多分この単語は/**vril**/と発音していたであろう。何らかの音をあてずに書いていたとは思われない。

“**Vril**”は作品を離れて、超自然的な、あるいはオカルト的な力全般を指す言葉となっている面がある。そういった力をまとめて扱うのに使い勝手の良い便利な言葉なのだろうが、それが実は発音不明で、つまり名前を与えて管理・支配しようという言葉の企みを裏切っているのは皮肉であり、ブルワー＝リットンのちょっとした仕掛けなのかもしれない。

参考文献

- Bulwer=Lytton, Edward. *The Coming Race* (1871). Edited with an Introduction by David Seed. Wesleyan UP, 2005.
- Burroughs, Edgar Rice. *A Princess of Mars* (1917). Penguin Classics. 2007.
- Dunsany, Lord. *The Gods of Pegāna* (1905). Wildside Press.
- Lovecraft, H. P. *The Call of Cthulhu and Other Weird Stories*.
- Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels* (1726). Penguin Classics. 2003.

- 荒俣宏. 「Cthulhu——発音の謎」 「トランシルヴァニア通信 No.3」所収 『ク・リトル・リトル・神話集』しおり.
- 大瀧啓裕. 『翻訳家の蔵書』 東京創元社、2016.
- 川越いつえ. 『英語の音声を科学する』 大修館書店、2007.
- スウィフト、ジョナサン. 『ガリヴァ旅行記』中野好夫訳 新潮社、1951.
- ダンセイニ、ロード. 『ペガーナの神々』荒俣宏訳 創土社、1975.
- . 『時と神々の物語』 中野善夫、中村融、安野玲、吉村満美子訳 河出書房新社、2005.
- . 「ペガーナの神々」安野玲訳 『時と神々の物語』所収.
- バローズ、エドガー・ライス. 『火星のプリンセス』厚木淳訳 合本版・火星シリーズ第1集所収 東京創元社、1999.
- . 『火星のプリンセス』小西宏訳 東京創元社、1965.
- 東雅夫. 「クトゥルー神話事典 第三版」 学研 M 文庫、2007.
- ブルワー＝リットン、エドワード. 『来るべき種族』小澤正人訳 月曜社、2018.
- ラヴクラフト、H. P. 『クトゥルーの呼び声』森瀬繚訳 星海社、2017.
- 他. 荒俣宏編『ク・リトル・リトル・神話集』 国書刊行会、1976.